



「当たり前」を捉え直してみる、ということ ～「教育環境学演習」での主体的な学びの試み～

人間科学部 村上 純一



人間科学部人間科学科人間教育コース専任講師。1983（昭和58）年、埼玉県浦和市（現：さいたま市浦和区）に生まれ、文教大学には2015年4月に着任。専門は教育学の、主に行政・政策に関する分野。キャリア教育の政策過程や保護者・地域住民と連携した学校教育の取り組み、東日本大震災被災地の学校経営に関する研究などを行っている。授業では「現代学校教育論」、「教育社会学」、「教育環境学」などを担当。鉄道旅行とスポーツ観戦が趣味。（むらかみ じゅんいち）

今回ご紹介する授業は人間科学部人間科学科で3年次秋学期の選択科目として開講している「教育環境学演習」である。受講生は例年20～30名程度と比較的少人数での演習形式の授業のため、テーマ設定から発表・討論まで、受講生の主体的・能動的な学びを重視している。「皆が自ら学ぶこと」、「ありふれた日常を見つめ直すこと」がこの授業の“二本柱”である。

そもそも「教育環境学」とは

今回ご紹介する「教育環境学演習」という授業。読んで字の如く「教育環境学の演習」という趣旨の授業であるが、そもそもこの「教育環境学」という学問分野自体が、実はなかなかのクセ者である。大きな書店に足を運んで「教育環境学」というタイトルの書を検索してみても、まずヒットすることは期待できない。運よく見つかったと思っても、手に取ってみると出版年が半世紀以上前であった、ということもある。いわゆる「スタンダード・テキスト」は存在せず、その意味では授業担当者の裁量が非常に大きい分野であるともいえる。

そうした強み(?)を生かして、この授業では扱う対象を「ひとの学びを取り巻くものすべて」とし、その活用法やそれらがひとの学びに与える影響、そこに潜む課題などを学生を巻き込んだ、いや、学生を主体とした議論・討論を通じて考えていく。当たり前

に思えるものを少し違った角度から捉えたときの新たな発見をどれだけ生み出せるか、それがこの授業の「肝」になる部分であると考えている。

学生が選んだテーマを、学生とともに考える

「ひとの学びを取り巻くものすべて」というと、実はこの世界の神羅万象およそすべての物事を対象に含めることができる。「教育環境学演習」は3年次秋学期に配当されている科目であるが、同年次春学期に「教育環境学」という名称の講義形式メインの科目があり、多くの受講生は春学期にその「教育環境学」を受講した上でこの「教育環境学演習」を受講するため、「教育環境学演習」初回の授業はその後の各回で扱うテーマの希望を受講生から募り、受講生と相談することから始める。昨年度(2016年度)は、受講生から出された希望を踏まえ、下記のようなテーマを扱った。

◆各々の母校にあった珍しい施設・設備

- ◆授業における体験学習の意義・課題
- ◆遊具の危険性を考える
- ◆「放課後の学習環境」を考える
- ◆学校教育におけるICTの活用
- ◆少人数指導の意義と課題
- ◆今日における部活動の課題
- ◆＜障害者差別解消法＞と学校
- ◆「教育とジェンダー」を考える
- ◆今日の子ども・若者への社会の期待
- ◆教育環境の「不易」と「流行」

いずれの回も、授業はまず、すべての受講生が発言することから始まる。自身の小中高の頃をふりかえり、経験したことを紹介してもらうときもあれば、あるお題を提示し、それに対する意見を述べてもらうこともある。いずれにせよ、授業の序盤ですべての受講生が何かしらの発言をすることになる。主体的な学びを自然に引き出すために、これは効果的かつ不可欠のことであると考えている。全員がひと通り発言を終えた後は、その中で出された意見・発言を発展させることで自然と討論が展開されていく。全体で討論をすることもあれば、いくつかの小グループに分けてのワークショップに繋げることもあるが、この段階に入れば、担当教員である私もまた立場は「受講者のひとり」となっている。



受講生が小グループに分かれ、ディスカッションを行っている様子

「文教のいいところ」探し

こうした受講生主体の議論・討論とともに、この授業で行っていることとして「受講生の個人プレゼンテーション」がある。期間中に1人1回ずつ行うものであるが、そのお題は「文教大学の特色ある教育環境とその長所の説明」としている。2年半を過ごしてきた文教大学の教育環境を見直し、その中で見出される「文教ならではの特色」を1つ取り上げ、紹介してもらおう。ここでも「教育環境」の対象は「自分の文教での学びを取り巻くものす

べて」としている。施設・設備といったハード面のみならず、学生をサポートする様々なプログラムやキャンパスを外から彩るもの、教職員を含めた「学生を見守る大人たち」を取り上げてくれる学生も少なくない。受講生自身がそれまでの文教大学での生活をふりかえり見直してみる機会とするとともに、私自身にとっても文教の新たな一面を知る絶好の機会となっている。



受講生による「文教のいいところ」紹介。このときは校舎周辺の自然環境の豊かさを取り上げている。

「主体的に学ぶ」ということ

以上、本稿では「教育環境学演習」について、その具体的な内容をご紹介してきた。

昨今、義務教育から大学教育まで、およそすべての教育の場において「児童／生徒／学生の主体的・能動的な学び」の重要性が謳われている。しかし、大学の授業においてそうした「学生の主体的な学び」を引き出すことは決して目新しいことでもなければ、大きな困難を伴うことでもないと思われる。学生が自身の歩みをふりかえる中で何かしら見逃していたものに気づき、それに自分の中で意味・意義を見出していくこと、そうした発見を教員も含めて授業の場にいる皆が共有していくこと、その積み重ねが自然と全員の「主体的な学び」に繋がっているものと考えられる。今回ご紹介した「教育環境学演習」の授業は、私自身がそのことを実感を持って確認する場にもなっている。

そして、学生の主体的な学びを引き出すためには、何よりも教員自身が「学ぶ」ということに主体的・能動的になり、そのことを楽しむ姿を学生に示していくことが重要であろう。「学ぶことの楽しさ」、「学べることの悦び」を大切に、今後も学生たちとともに、より一層自らの学びを深めていきたいと考えている。